



いわむろのみらい新聞

第7号

2面～9面
第2回岩室訪問
10面
中間報告を終えて…
11面
第1回岩室訪問
オープンキャンパス
12面
今宵、ホテルに酔う

6月25日コアメンバーによる 突撃、岩室中学校！

6月25日、岩室中学校にてコアグループ5人による1年生の総合学習の授業が行われた。普段、総合学習の時間では岩室の歴史や現状について調査し、地域を考える取り組みがなされている。当日は、岩室と接点のなかった外部として、ムサビ生が考える「いわむろのみらい」を知ってもらうことを目的として、授業は進められた。この授業では、ムサビ生が掲げるプロジェクトのテーマ「ほっ岩室」を理解してもらい、まちをどのような切り口で見えていくか、一



つの考え方を提示している。またアートサイトやワークショップ、街路灯設置といった、具体的な活動例を知ってもらうことで、「まちづくり」へのムサビ生の関わり方を見てもらった。

授業中、反響が大きかったのはムサビ生の大学生生活に関わること。ほかにもプロジェクトの予算を問うなど、現実的でシビアな質問も飛び出した。一方コアグループのメンバーからは、授業の主題であるプロジェクトに対する具体的な質問がなかったことへの心配の声が挙がった。

生徒を対象に実施した授業アンケートによると、「いわむろのみらい」創生プロジェクトの存在を知っていたのは全体の約1割程度。その一方で観光複合施設や公園計画などへの興味が多く記されており、プロジェクトへの関心が伺える内容となった。岩室の新たなまちづくりは始まったばかり。まちの未来を担う若い世代との交流は互いに良い刺激となったようだ。

岩室の魅力を求めて

2007. 6. 23-25 第2回訪問

お馴染みのメンバーです

コアグループ プロジェクトコーディネーション

参加学生／視覚伝達デザイン・基礎デザイン
 ・建築・デザイン情報・芸術文化
 (計10名)
 担当教員／宮島慎吾(基礎デザイン学科教授)

今回の岩室訪問では、コアグループによる岩室中学校訪問をはじめ、公会堂にてキャラクタ―開発・ストリートファニチュア計画・ワークショップ計画・サイン計画・観光デザイン計画の各チームによる中間報告が行われた。他にもワークショップチームが婦人会の方と「岩室甚句」づくりをしたり、ホタル観賞のイベントも楽しめる日程となっていた。

24日には、いわむろみらい研究会の方とムサビ生の間で座談会を開き、率直な意見交換がされるなど、内容盛り沢山の訪問となった。

ほつ岩室

ほっとする里山

「里山」というコンパクトなスケール感と、それを囲む自然環境を活かした景観づくり。

風景 ・ 景観

ほっこり郷の味

岩室独自の食文化を無理なく現代の生活に取り入れることで、岩室の伝統を大切に作る心をつくる。

風土 ・ 産物

ほんわか生活

地産地生、帰農やスローライフをバックアップし、岩室での「つくる」「暮らす」を推進する。

風体 ・ 生活

惚れる心くぱり

温泉・芸妓・旅館の三本柱を建て直し、華や粋を感じる「大人の為の岩室温泉」をつくっていく。

風情 ・ もてなし

ホットな情報

情報発信の中心をつくることで、岩室内外へ積極的にイベントをアピールしていく。

風聞 ・ 催し



観光複合施設の建設が決まったが、運営方法の見通しが立っていない。プロジェクト全体の方向性を定める必要がある中で、岩室における施設の位置付けや運営方針を考えることが各プロジェクトの個性を活かす事に繋がるのではない。(宮島慎吾・談)

「いわむろのみらい」創生プロジェクト全体の方向性を示し、各チームを繋いで集約していく役割りを担う。また岩室の方とムサビ生、岩室で暮らす方同士の橋渡しとなり、学科・学年・地域の枠を超えて情報交換や調査を重ね、全体を見通したい。「ほつ岩室」をコンセプトに掲げてまちの魅力を引き出し、未来像を描いていく。歴史・現在・展望をふまえた上で、「景観」「産物」「生活」「もてなし」「催し」の5つを軸に据え、岩室らしさを探っていく。

岩室に対して関心や親しみ、愛着を持ってもらうためのシンボルやイメージとしてのキャラクターを提案する。岩室の風土や文化、これまでに使用されたキャラクターやシンボルマークなど広く調査を行う。また地元の方々へのインタビューを通して、岩室の特色を探し、得られたキーワードからキャラクター像を考える。受け手の視点を意識してデザインを推敲し、媒体に応じたバリエーションの研究を行う。最終段階においては具体的な展開を示したい。

新キャラ登場!

キャラクター開発

参加学生/芸術文化学科(計5名)
担当教員/楯義明(芸術文化学科教授)
岡部あおみ(芸術文化学科教授)

新たな岩室の顔へ



●新しいイメージのためのヒント

湯けむり 健康 リフレッシュ
リラックス 湯の花 タオル
露天風呂 風呂
気持ちいい 湯治 蒸し

●岩室のイメージ

よりなれ じよんのび
ほっこり 粹



●二つのイメージを合わせたキャラクター案



写真左上/中間報告で沸く会場
写真右下/ 笑いを誘った学生二人

岩室での中間報告以後、他のプロジェクトチームから様々な好意的情報をもたらされ、これまでとは異なったスタンスでの取り組みが出来るように思う。本番では沢山の候補の中から選んでもらえるように頑張っていく。(楯義明・談)

キャラクターとシンボルマークの違いとは何か。新潟県にある既存のものを例に挙げながら、2つの違いを明確にした上で、制作過程から完成までの道程を示したキャラクター開発チーム。公会堂での中間報告では会場の笑いを誘うなど、穏やかな雰囲気の中進められた。

チームがカウンタダウンプロジェクトに使われたキャラクター「湯むすめ」の問題点としてまず挙げたのは、造形上「岩室らしさ」を想像させる要素が乏しく、印象が弱い点。一目で記憶してもらい、地元の方と観光客の双方が愛着を持てるような地域色あるものを目指している。

中間報告にて示されたキャラクター案は、「岩室」から派生する言葉やイメージを合わせ、新たなメッセージ性を持たせたイメージワードを元に展開されている。今後は実用化に向け、さらに質を高めたキャラクターデザインを提案し、各種媒体への展開方法を調査していく。最終的には岩室の方々に選んでもらうようだ。

見つけたら座ってみよう!

ストリートファニチュア計画

参加学生/空間演出デザイン学科(計9名)

担当教員/森豪男(空間演出デザイン学科教授)

「公共の場に設置される家具」を意味するストリートファニチュア。不特定多数の人が使うものであり、岩室の暮らしに密着したものとなる。つまり提案する上で、地域住民・観光客双方にとって快適で魅力あるものを探る必要がある。制作過程から完成までの間、住民の方々と率直な意見交換がしたい。まず実物を制作・設置することで、住民が参加してくれるような、きっかけをつくる。その上で岩室らしいストリートファニチュアの提案をしていきたい。

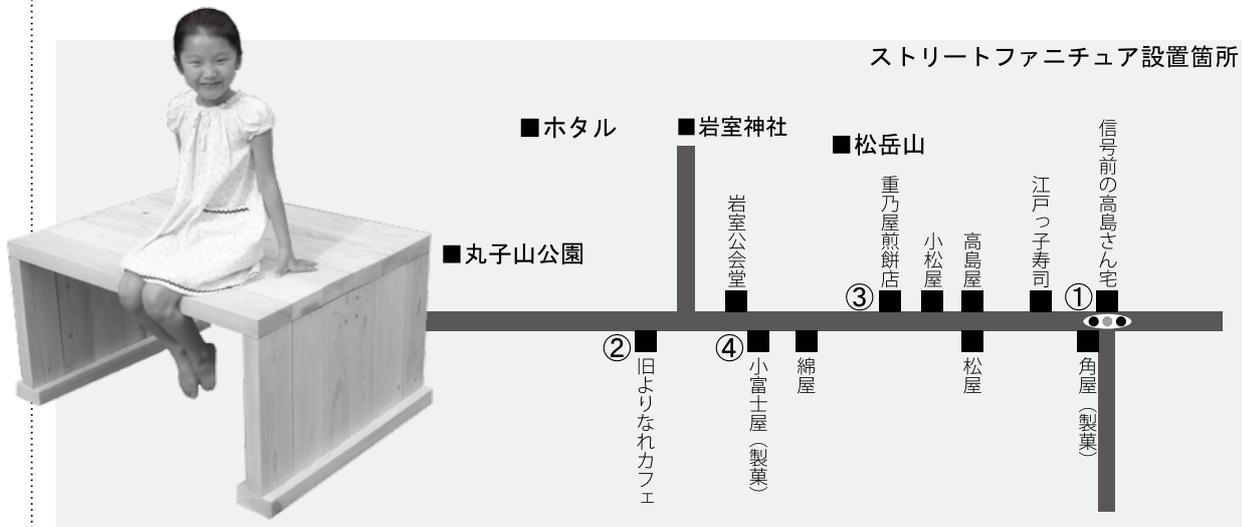
地域に根ざす椅子を



② 旧よりなれカフェ前



① 信号前の高島さん宅



③ 重乃屋煎餅店の前



④ 小富士屋の駐車場





丸子山公園計画デッキ案



ストリートファニチュア製作風景

きっかけとしてのファニチュア設置後、多くの反応が得られたことに手応えを感じている。住民の意見を反映し、デザイン性に富んだファニチュアの提案を目指す。状況が許せば7月の最終報告後も活動を続けたい。

(森豪男・談)



丸子山公園計画のデッキ案



ストリートファニチュア制作風景



丸子山公園計画のデッキ案

6月23日の訪問初日、旅館が軒を並べるメインストリート沿いにベンチが設置された。設置場所は信号前の高島さん宅、重乃屋煎餅店の前、小富士屋さんの駐車場、以前よりなれカフェが設けられた場所の計4カ所。椅子は単なる休憩場所としてではなく、人が集まり交流できる場として設置された。当初は、公園の裏山にある杉の伐採計画が持ち上がったので、使用を考慮した。しかしこの時点では素材とすることに難があったため、檜が使われることになった。

設置後多く聞かれたのは、座部が高く、子どもや足腰の弱くなっている人にとっては座りにくい、という点。外観に対しての意見もあり、檜の白さが岩室の街並みに馴染みきれず違和感を残していることが挙げられた。また形状に美大生らしさを求める声も。しかし改善の余地があるものの、住民の反響が大きかったのも事実。まちの未来像を考えてもらう「きっかけ」を投げ入れ、反応を得られた点で手応えを感じたようだ。

また、これらのベンチと並行

して進められているのは、丸小山公園計画と松岳山のメモリアルベンチ計画。中間報告では、丸小山計画の模型による提案と、メモリアルベンチ計画のラフスケッチが示された。丸小山公園計画はグラウンドから続く芝の斜面に不規則にベンチを設置していくものと、公園を取り囲む木に沿って設置する案が出された。メモリアルベンチ計画は松岳山の等高線の曲線を活かしたデザイン案を出した。しかし提案に対して住民からは「芝の上にベンチの設置をすると芝刈りの妨げになるため、手入れしやすい構造にしてほしい」との意見があった。現状の管理体制を考慮した上で、住民の方々が参加しやすく、参加したくなるような提案が求められるだろう。

中間報告までは、「きっかけ」づくりとしてのベンチ設置を目指していた。しかし座談会などを通じて地元の方と話し合いの場を持つうちに、さらに先の展開も視野に入れ始めた。住民の意見を汲みつつ、岩室らしさを探しながら、デザイン性に富んだ提案が期待されている。

岩室を歌ってみよう!

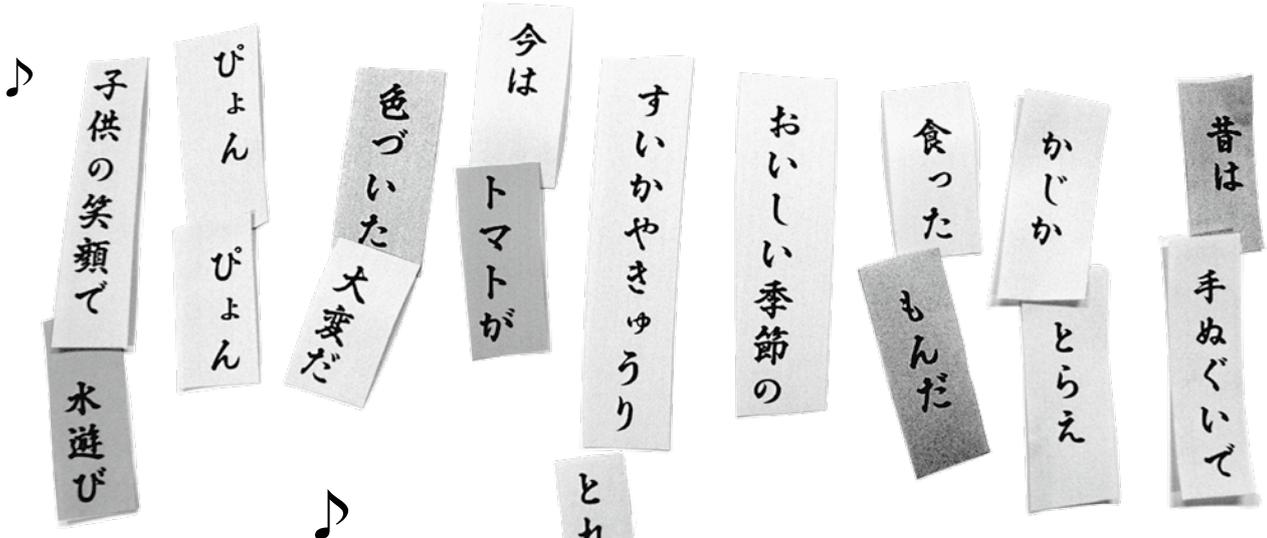
ワークショップ計画

参加学生/視覚伝達デザイン学科(計12名)

担当教員/斉藤啓子(視覚伝達デザイン学科教授)

「岩室地区の暮らし」をテーマに地域の方々たちとまちを再発見する体験学習をし、世代間の交流を目的として活動する。人と人の繋がりを育むためには、何度も交流を重ねていくことが必要となるだろう。岩室とムサビ生を繋ぐ場であると同時に、年代や立場、価値観の異なる岩室の方向士が交流できる場をつくりたい。住民の方々にも企画の段階から積極的に関わっていただけるとは、より岩室らしい人の輪を繋げていけるだろう。

甚句で作る未来



当日の進行表	
9:00	●会場設営
9:45	●受付開始
10:00	●ワークショップ開始 ・ワークショップの説明 (1. コンセプト 2. 甚句を作るわけ 3. 本日の流れ) ・ムサビ甚句披露
10:30	●班に分かれる ・他己紹介(どんなひとかな?知り合おう!) ムサビ × 婦人会でペアになる。 相手のことを聞いて紙に記入。 話してわかったお互いのことを紙を見せながら他の人に紹介する。 ・背中でもじもじ 背中に文字を書いて伝言ゲーム。 そのことばが班名になる。 終わった順に、テーマを引く。
10:50	●詩づくり ①テーマについて、話をする ②一人一人詩を書いてもらう ③班内で各自の詩の発表会
11:45	●詩の発表会
12:00	昼食
13:20	●詩づくり ④各自の詩をちぎる、並べ替える ⑤仮止めで貼り込む ⑥発表の練習をする
14:00	●曲にのせる 仮止めにしてある詩を入れ替えながら歌にしてい
14:30	●おわりのあいさつ





「あそび」をテーマに

6月24日公会堂にて催された岩室甚句のワークショップに婦人会の方々に参加を得ることができた。5つのグループを作つて「食」「あそび」「場所」「恋愛」「行事」というテーマに分かれ、学生と話を花をさかせながら、岩室での生活を振り返つていただいた。テーマはどの世代にも共有できるものを選んでいる。

それぞれ詩を考えたら、筆を使って布や和紙に書き留めていく。次に単語ごとにちぎり、グループ内で再構成して甚句にしていった。すると意味の通じないものや、通じても元の詩と全く違うものができ、完成後は笑いを誘っていた。ワークショップ後、婦人会の方へのインタビューでは「詩をつくる時のテーマが難しかった」との意見があつた一方で、「自分たちでは考えつかないような企画だつたし、若い人と話せて楽しかった。」との声も。学生たちにとつても、普段交流のない方々と過ごした時間は楽しいものになつたようだ。

ワークショップの目的は、自主的に岩室の未来を作つていけるよう、地域へ関心の目を向けてもらうことにある。甚句づくりをテーマとしたのは、普段意識されることのない岩室への思いを詩にすることで、岩室の魅力を目に見えるかたちにして再認識できるだろう、との考えから。またお互いの気持ちを知り、歌や踊りで楽しむこともできる。中間報告では三味線の演奏に合わせて完成した甚句が披露され、会場を湧かせた。出来上がった作品は、屏風やCDに残していくことを検討している。



昔話に花が咲く



それぞれが作った甚句を並び替えて新たな甚句へ

様々な価値観を持つ人たちが交流を重ねることで、新たなまちの姿が見えてくる。人と人とを繋ぐ場が住民の活気溢れるまちづくりの拠点となるだろう。このチームの試みが岩室の未来をつくっていく土台のひとつとなっていけばと思う。

(斉藤啓子・談)

岩室の案内役

サイン計画 マーク・ロゴタイプ

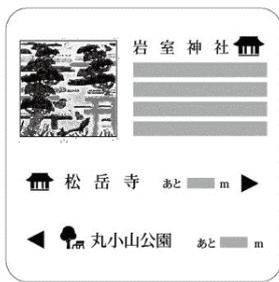
参加学生／視覚伝達デザイン学科（計5名）

担当教員／後藤吉郎（視覚伝達デザイン学科教授）

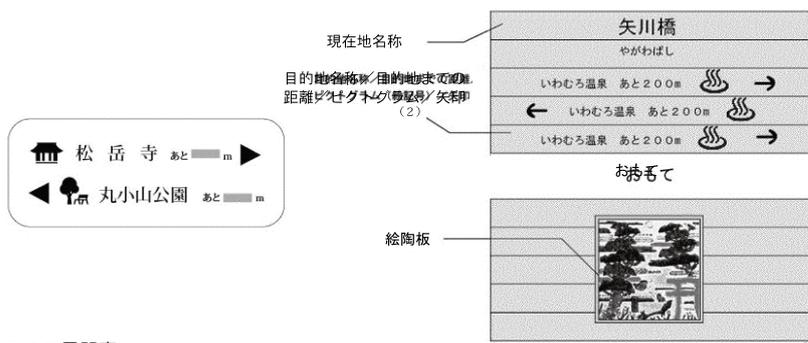
サインシステムとは情報を過不足なくスムーズに伝える役割を担う。住民には生活の一部として、観光客には岩室のまち全体を把握するための手段となる。岩室温泉全体が同じ方向性を持ち、岩室というまちをどう捉え、人々に見せていきたいのか考える必要があるだろう。そのため各プロジェクトと連携し、住民の意見を取り入れながらサインシステムをデザインしていく。総意に基づき、斬新で機能的なサインシステムを提案し、最終形態としたい。

歩きやすいまちへ

サイン



上図／岩室温泉に設置する案内板の3つの展開案



うろら

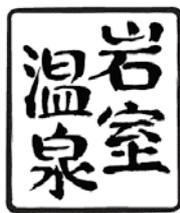


中間報告の様子

サインシステムは街頭に置かれる案内板と配布される地図を共通のピクトグラム⁽²⁾を使用するなどして、統一を図っていく予定。「情報を見やすく整理し、適切な場所への設置を」考えていく。住民と観光客の活動区域を明確にし、岩室が「住み良いまち」であると同時に、観光客にとつて「訪れやすく、歩きやすいまち」になることが求められている。

(1) サインシステム：記号や信号によつて系統に分けて示したり、図表化した看板や案内板。
(2) ピクトグラム：簡潔な具象図形で表された絵言葉。

マーク・ロゴタイプ⁽³⁾



いわむろおんせん 岩室温泉



上図／岩室温泉のイメージとなる3つのマーク・ロゴ案

(3) マーク：意味や概念を示すために用いられる記号、符号、しるし、標章、図案等のこと。
(4) ロゴタイプ：会社名や商品名などを独特の字体にデザインして表したものだ。

前年度のものを引き継ぐかたちで、鴈のモチーフを使つてデザイン。足元の水面部分を流動的な曲線にして、より水面であることを意識させ、鴈が優雅に飛び立つ様子を表現している。

岩室温泉に使用するロゴタイプは、柔らかさを感じる丸みを帯びたデザインと、和を基調としたもの2つを制作。温泉街であることを考慮し、伝統的かつ親しみの持てるように考えられている。今後は全体のテーマである「ほっ岩室」から感じられる優しい雰囲気を意識したデザイン展開を考えているようだ。

マークロゴは「岩室のかたち」を探してきたが「ほっ」のイメージに合うデザインに至っていない。コンセプトの持つ雰囲気を中心に、提案していきたい。サインはバイパスをアクセスポイントとして地図・ナビゲーション案を展開する。
(後藤吉郎・談)

魅力、再発見！

観光デザイン計画

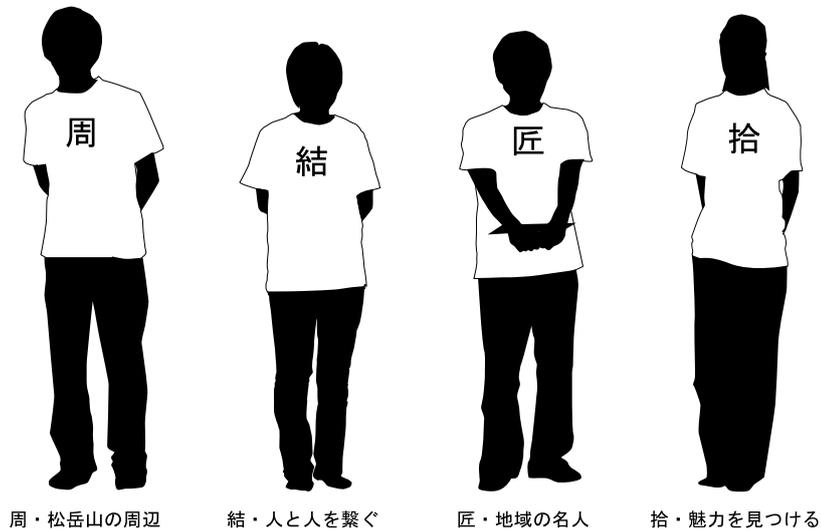
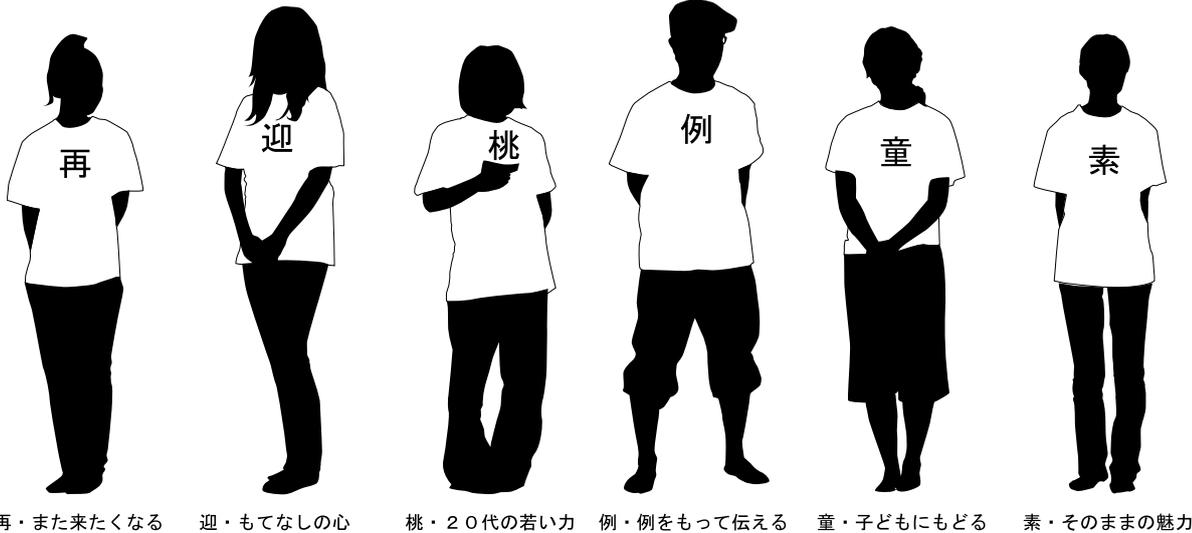
参加学生／基礎デザイン学科（計10名）

担当教員／宮島慎吾（基礎デザイン学科教授）

野口正治（基礎デザイン学科非常勤講師）

日常暮らしているまちと、どのような関わりを持って生活しているだろうか。当たり前に行き見過ごししてしまっている事柄がたくさんあるだろう。地域に埋もれているものを掘り起こし、岩室の魅力を再認識してもらうことを目的としている。岩室の風土、人、産品など多様な角度から調査・分析していく。外部からの視点を取り入れることで、「岩室らしさ」を引き出す。人の発掘やアイテム開発、最終的にはPR展開へと繋がる提案としていきたい。

岩室で見つけた10のタネ



地域に埋もれているものを掘り起こし、岩室の魅力を再認識してもらうことを目的としている。岩室の風土、人、産品など多様な角度から調査・分析していく。外部からの視点を取り入れることで、「岩室らしさ」を引き出す。

（野口正治・談）

10人が10の視点で挑んだ岩室。各々が岩室の景観、人、産物などに焦点を当て、新たな観光のあり方について考えていく試みがなされた。中間報告では自作のTシャツを着て登場し、それぞれが漢字一文字に込めたテーマを背に付けて報告した。調査はそれぞれの視点で行われたため、内容が重複するものもあったが、岩室の景観について取り上げているものも多かった。しかし裏を返せば、里山の景色は訪れる人々の目を惹く魅力がある、と考えることもできるだろう。

また、未来を担う若い世代をまちづくりの重要な人材として捉えている点は、プロジェクト全体の方針でもある。他には何かの芸や技に秀でた人材を発掘し、岩室の良さを「人」で捉えていく案も出された。質疑では「内容が抽象的」という指摘があった一方で、「住んでいるとわからない岩室の良さがわかった」との意見も。今後は10のテーマを具体化して冊子としてまとめ、展開方法を示す予定である。

中間報告を終えて… 2007.6.24 at 公会堂

ムサビ生訪問の際に行われたワークショップやイスの設置をはじめ様々な活動に寄せられた岩室の方・教員・学生の声を集めました！



コアコンセプトの「ほっ岩室」がみえてきました。住民の意見の中には、もっと岩室らしさみたいなものをつくってほしいというような意見もありましたが、私は必ずしもそうだとは思いません。個性とは外から与えられるものではなくて、住民たちの中から出るものだと思うので、ムサビさんに全て丸投げした状態で個性を求めるのは間違いではないかと思います。

ワークショップで、若い子たちがもりもり食べて、お鍋が空になるのがうれしかった。



視察の時に、「こんなのは?」「あんなのはどう?」とたくさん企画を持ち込んで、残してくれたら、視察でムサビ生が来る時以外も交流の場を持てるようになるのではないか?

しゃべり手がユニーク

写真のスライドに知ってる人を入れてくれるのが楽しくていいね!

ストリートファニチュアは考え方はおもしろいのだけれど、実際に観光客の目に触れるものなので、外観にも気を使ってほしかった。

ワークショップが、とにかく元気にやっていたのがよかった。岩室の文化(甚句)を題材に婦人会のおばちゃんたちを巻き込んでわいわい盛り上がっていて楽しそうだった。住んでいる自分たちが楽しめない・自信の持てない街に誰が観光にくるだろうか。「自分たちの街はいい街だ!」みたいな街の内側からでる自信が人を呼ぶのだと思う。個人的には、あの「おばちゃんパワー」がまちづくりのカギになるような気がします。

もっと美大生らしさを!

公会堂で行われた中間報告には、直前にワークショップが開催されていたこともあり、多くの住民の参加で大変賑やかなものとなった。そんな中で始まったプレゼンテーションも時折笑いが湧き起こる、和やかなムードで進化した。しかし質疑応答の際には、岩室に住む人ならではの鋭い意見も飛び交い、住民サイド、学生サイド共にこのプロジェクトに対する真剣さを感じ取れる内容となった。このような意見交換は、各チームにより刺激を与えたことだろう。7月24日に行われる最終プレゼンテーションに向けての励みになる訪問だったのではないだろうか。

今回のプレゼンは、住民とのコミュニケーションが少し足りなかったためにつっこみ不足の部分も確かにあった。けれど、きちんと理解もし合ったし、最終プレゼンはきっと大丈夫。うまくいくと思う。

新たな 気持ちで

2007. 5. 12-14

第1回訪問

岩室での出会い

今年度から始まったプロジェクトのメンバーを新たに
 加え、5月12-14日の3日間、
 ムサビの学生が第1回岩室訪
 問へ赴いた。期待と緊張感を
 持ちながら、各々が岩室の人
 たちとの出会いを楽しんだ。
 丸小山公園ではフォークダ
 ンスの輪に交せてもらい、歌
 や踊りを通して交流をした。
 これが6月に開かれた「みん
 なでつくりろ岩室甚句」のワー
 クショップをするきっかけに
 なった。観光デザインチーム
 は天神山登山へ。1時間程の
 ハイキングでうっすらと汗を
 滲ませつつ、緑が濃くなり

はじめた自然を満喫できた。岩
 室温泉地域の西側の山並を越
 えるとすぐ日本海を臨めるが、
 ムサビ生が足を運んだ間瀬は
 漁港のあるまち。また、旅館
 やホテルの食事で海山どちら
 の幸も楽しめる岩室の特色を
 垣間見てきた。
 米どころ新潟ならではの景
 色といえば、夏井のはさ木が
 ある。田んぼのあぜ道に沿っ
 てはさ木(トネリコ)が植え
 られていて、収穫を終えた黄
 金色の稲を乾燥させるために
 使われていた。保存会の働き
 かけで、現在もその光景を見
 ることができる。視界に広が

る田んぼを一望し、学生の間
 からは感嘆の声も上がってい
 た。米関連で喜ばれていたの
 は、宝山酒造への訪問。女将
 さんに仕込蔵の中を案内して
 いただき、日本酒の香りで満
 ちた仕事場を歩きながら、学
 生は酒造づくりの説明を熱心
 に聞き入っていた。
 その他にもかっぽうぎ隊の方
 々々にお昼を振舞ってもらっ
 たり、いわむろみらい研究会
 の方々との親睦会では、芸妓
 さんの舞踊や演奏といった岩
 室の文化に触れる機会もある
 など、充実した時間を過ごし
 たようだ。

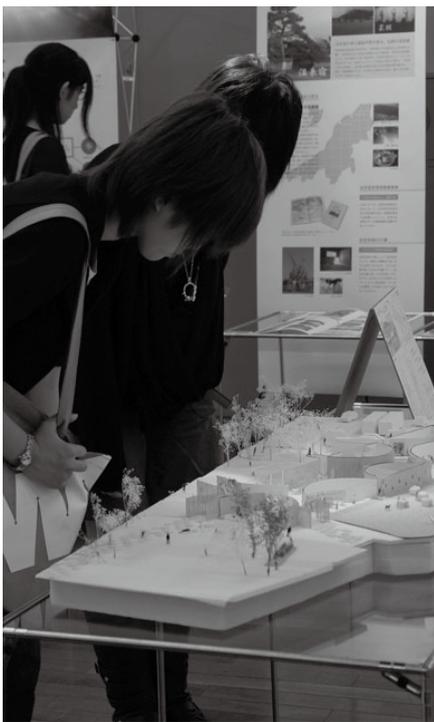


料理を作ってくれたかっぽうぎ隊の方々

武蔵野美術大学 オープンキャンパス開催 岩室のプロジェクトも出展

6月16-17日、武蔵野美術大
 学で開催されたオープンキャン
 パス2007。晴天の中、
 昨年度よりも1000人ほど
 多い来場者に足を運んでいた
 だいた。この2日間は教授に
 よる作品の講評を見たり、学
 食が使用できるほか、ワーク
 ショップやキャンパスツアー
 などオープンキャンパスなら
 ではの特設企画も盛り沢山だ。
 入試相談会で熱心に話を聞く
 受験生の姿も見受けられた。

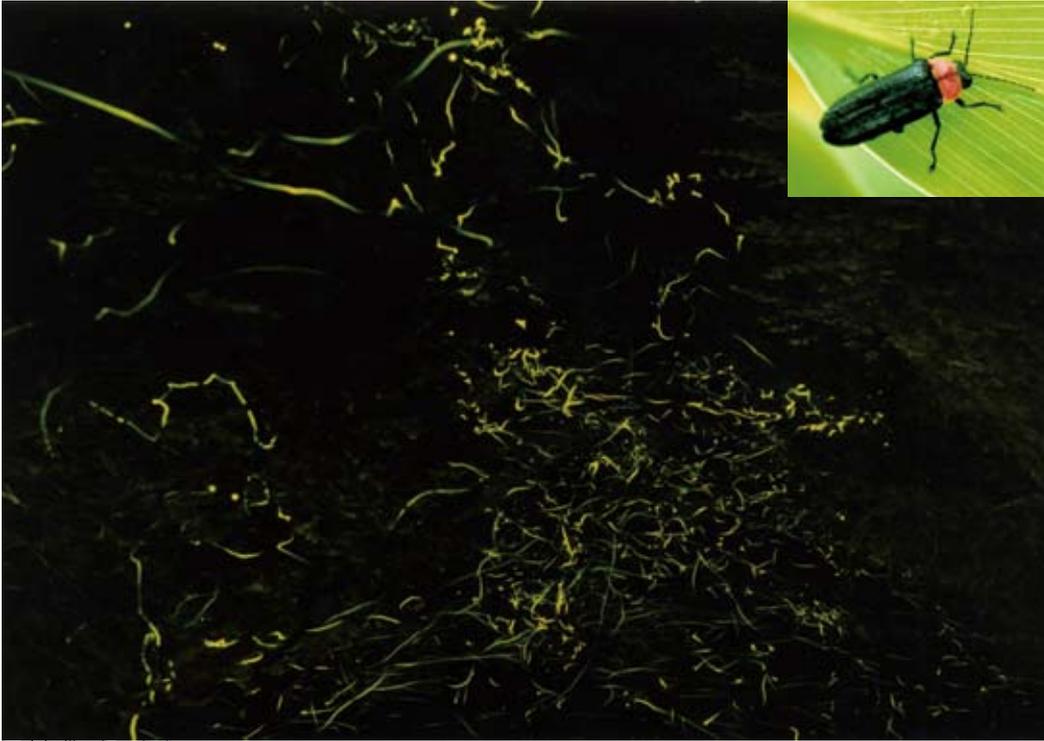
10以上の大きな企画展示があ
 る中、その一企画として産官学
 共同プロジェクトの紹介があ
 り、「いわむろのみらい」創生
 プロジェクトも出展した。出展
 内容は昨年度の活動を中心に
 アートサイト岩室温泉2007
 の様子などをパネルで紹介。岩
 室温泉におけるムサビ生と岩室
 の方々のまちづくりを振り返る
 良い機会となり、プロジェクト
 に参加した学生たちにとっても
 考え深い展示となった。また観
 光複合施設や、杉を落葉樹に
 変える公園計画の模型も出展
 され、熱心に見入る来訪者の
 姿も。大学の活動を外部へ発
 信していく意味で成功と言え
 るのではないだろうか。



岩室の展示コーナーで建築模型を見る学生

今宵、ホタルに酔う

岩室の6月といえば「冬妻ホタル」^{ひよつま}。山すそはホタルを待ちわびる人たちで大賑わいでした。



写真提供：坂田久雄

冬妻ホタルが生息するのは山すそにある川沿いの一本道。東京に比べてずっと暗い道を安全に歩けるよう、地元の人たちが観光客に明かりを抑えた提灯を手渡していました。ホタルのいるスポットで消えるようにできているそうです。これも立派なデザインだなあと思いつながらいそいそと山へ。はぐれることを心配しながら道行く人と挨拶していると、暗がりの中から楽しそうな声がします。

暗闇に目が慣れた頃、緑色の細く長い光があちこちからやってきました。ついにホタルの登場です。やわらかなその光は何匹かで呼応しているようで、ふわふわと飛びながら徐々に増えたり減ったりしてました。

幻想的な光に見とれていると、隣りにいた方がホタルを手にとつて見せてくれたのですが、指の間から光りが溢れて提灯のようでした。

このような情景を私たちが観られるように、夜遅くまで気を配ってくれるボランティアの方々に感謝して、夢ごこちで宿へ帰りました。

(河内・記)

編集後記

今号より新聞を担当するメディアデザインチームです。新聞を通して楽しい「まちづくり」のヒントを見つけていただければ幸いです。最後に、メンバーから初視察の感想を：(イシダ) 温泉と聞いてそわそわしないはずがない。数々の温泉地を極めてきたといわれる僕には初の岩室温泉。人情に溢れた人も本当に感動に値する。そんな岩室に人を呼びたいと思う。

(イトウ) 地元の人が本当に良くしてくれて温かい場所だと感じました。新たに始まる、いわむろみらい新聞を楽しむにしてください。(オサフネ) 岩室と接点のなかった僕が、今こんなに必死に岩室を盛

り上げたいと思える事がなんだか不思議です。

(カワチ) はじめて来たのに「お帰りなさい」と言われた気がしました。9月に帰るのが今から楽しみです。(シムラ) 自然が豊かで開放的な気分になりました。田んぼを久しぶりに見て、すごく懐かしかったです。良い場所ですね。

(ニシムラ) 緑を湛える里山と田んぼに包まれる安堵感、人の温かさに触れられる貴重な時間でした。実りの秋、冬の酒造が待ち遠しいです。(ハマ) 東京の荒んだ空気に比べて、岩室の空気は優しく身体にしみ込んできて、「空気がおいしい」という言葉を実感しました。



発行日 2007年7月14日
 発行元 「いわむろのみらい」創生プロジェクト
 メディアデザインチーム
 編集長：西村奈都子、副編集長：濱祐斗
 デザイナー：石田真郷、河内奈緒
 ライター：伊藤聡里、長船仁、志村享史
 〒187-8505
 東京都小平市小川町1-736
 武蔵野美術大学/研究支援センター
 Tel & Fax 042-342-7263
 URL <http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/>
 © 「いわむろのみらい」創生プロジェクト